

「添う」ということ

－阪神大震災の贈りもの－

広島文教女子大学 文学部 教授 植 田 ひ と み

植田先生は、阪神大震災でご両親を同時に失われるという苛酷な試練に遭遇されました。今回のレクチャーではそのご自身の体験の一部始終を、沸き起こる感情を抑えつつ、冷静かつ明快な言葉で語ってくださいました。しかし、内容の性格上、講演要旨の年報への収録を辞退したいという先生ご自身の意志を、編集者としても尊重したいと考えました。生々しい体験を、学者として濾過されたレクチャーに対して、聴講した本学の学生の反響が大きく、寄せられた感想文の中から次に2編を紹介して、講演要旨に代えることにします。

【聴講感想文 1】

印象に残ったのは、植田先生がご両親が即死であればいいと願われたということと、当事者と第三者のギャップのことである。

即死であればいいと願われたのは、先生自身の気持ちが救われるからと言われたが、ご両親への愛情でもあったと思う。極限状態での究極の愛の形ではないだろうか。胸が痛くなった。私だったらどう思うか考えたが、考えが及ばない。想像もつかないことが現実に関わり、それを受けとめねばならない運命というか、人生の皮肉を感じた。生きていて欲しいとは願わなかった先生のお気持ちは聞くだけでもつらいものだった。

当事者と第三者のギャップについては、まさにその通りだ。私は阪神大震災を映像を通してしか知らず、例えばテレビではあまり伝えない「死」に関わる部分については、初めて先生からお聞きした。テレビで見るよりも、体験談の方が何倍も衝撃があった。知った気になって、実は何も感じていない自分に気づかされた。当事者と第三者のギャップを認識し、第三者はギャップを埋める努力をすることが必要だと思った。

そして「添う」ということの大切さは、私も最近実感した。10日前に幼なじみを交通事故で失った。ここ何年かは会っていないところへの、突然の知らせだった。まだ20歳だった。このことを何人かの友人に話したのだが、反応が様々で、こちらがもっと悲しくなるようなものもあった。その中で、私の話をただ聞いてくれる友人がいた。特別な言葉はなく、うなずいてくれただけだが、それが一番救われた。この経験から、私も「添う」ことの大切さが分かった。

「死」から何かを得ることが、生きている人の務めではないだろうか。「死」を生の中で生

かしていくことが、その人の「死」を無駄にしないことになるのではないかと、先生のお話と友人の死を通して感じている。（文学部 4年 信田祐子）

【聴講感想文 2】

植田ひとみ先生の講演には感動しました。

私はボランティアとして神戸へ2週間程行きました。自分では、当事者にはなれないとしても、少しは、当事者に近づけたのではないか、近づきたい、と思っていました。しかし、どんなにがんばっても、私は当事者にはなれません。

そして、時が経つにつれ、忘れてしまっている自分にも気づきました。人間は寂しいなと思いました。阪神大震災はつらい思い出もたくさん残しました。忘れたいと思うようなこともたくさんあります。でも、自然と共存していくこととか、人と人が関わり合いながら生きていく、ということも学ばせてくれました。

人間は忘れてしまう動物ではあるけれど、できるだけ忘れないようにしたいと思いました。当事者にはなれないけれど、当事者に近づく努力はしていきたいです。それは、当事者の話に耳を傾けることでいいと思います。

自然に添い、人に添って生きていきたいと思います。（文学部 4年 石塚のり子）